

会員報告 第6班 平成23年4月16日(土)～4月24日(日)

○会社名 徳倉建設株式会社 (報告会発表文から)

参加した方 (4人: ^{みふねまさと}三舟正人 ^{はたなか}畑中 ^{かおる}香 ^{にしじまのぶや}西嶋信也 ^{はせがわこういち}長谷川硬一の皆さん)

赴任期間が4月17日から24日までの1週間、福島県の相馬市で名工さんの引き継ぎとして入りました。このほか、相馬市の方には下里建設さんも同行しています。

まず、出発から現地到着までの苦勞ですけど、前もって名工さんに何回か連絡させていただきまして、準備するものとか現地の状況とかお聞きしていたので、現地に行っても特にこれがなくて困ったとかそういうことでの苦勞はありませんでした。助かりました。

最初、仙台にある愛子防災センターに受け付けに行きまして、そこで簡単な地図と説明をいただいて現地に乗込みましたが、その地図がよくわからなくて、自分も仙台に不慣れだったのですが、結局カーナビで当たりをつけて出発はしたものの結局迷ってしまって、田んぼのよくわからない所をぐるぐる回って、行き着く所、地元の消防団の方に会いましたので、いただいた地図を見せてここに行きたいんですけどということで、地元の消防団の方に先導していってもらったのが私たちでございます。

希望なのですが、できれば住宅地図にマークするなり、近くの家番地まで教えていただければ、私どもは震災後1カ月経っていただけなのであらかた混乱もなく、カーナビも十分使えるような状態だったと思っていましたので、こういうことがあってはいけないんでしょうけど、もしあったらそうしていただけると助かると思いました。

現地到着後、作業中困ったことですけど、物資とか燃料に関しては、1カ月経っていただけなのでそんなに困ることもなかったです。セブンイレブンとかコンビニ関係も必要な物が日に日に増えていくのがわかるくらい、物資的には過不足なく、ほしいものはたいていのものがあつたと思います。

作業の方ですけど、私どもが行って3日目くらいですか、排水ポンプ車が今まで頑張った疲れもあつたかもしれないですけど、トラブルを起こしてしまいました。最初壊れて、次の日にバッテリー交換して、その翌日にメンテナンスの方に、担当のお役所の方に相談して、連絡を取り合つてやつたんですけど、どうしてもうまく機能しなくなって、最後に湖畔公園ですか、相馬市から車で1時間弱だったと思いますが、そちらの方に回送することになりました。夕方、回収して、そちらの方に回送。回送する中、雪が降ってきました、薄暗くなってきて、だんだん暗くなって、結構冷や冷やしながら走つた記憶をまだ覚えています。途中、一時は風も吹いてきました。滑りかけたりして。あの思いはまだ忘れないうです。

それが1つ苦勞あつたのと、あと、最終日、宮城の亘理町にポンプ車の交換ということで、応援に行きました。当日は朝から雨でした。放射線の関係があつて、雨のときはやめてくださいと発注元から指導いただき、午前中ずっと待機してました。午後からやんできたからということで作業を始めたのですが、今度は風が吹いてきました。東北地方、まだ寒いんですね。ですから、結構寒い思いをしながら排水ポンプのホースを引き上げたり、

再度巻き直して、また新しく機械をセットしたり。寒い中でやったという苦労が印象に残っています。

支援を終えて感じたこと、最終的な感想ですけど、7日間のうち正味4日、5日で、途中、待機とかありまして。その間、ボランティアも一時は考えました。地元さんに何かお手伝いできるものはないか。とはいつつも、いざとなったら行くことになりますので、半端になるのもどうかという思いで自粛して待機していたという状態が何日かありました。うちの班としては、できるだけことはやったとは思っています。

最後に、先週まで仙台市内で復興支援の業務をやっていました。車で15分ほど行くと、まだ田畑があるんですね。田畑の上に、木の残材とかいろいろなゴミ。車も横転している状態です。

これからまた支援業務とかがありましたら、私どもでもできることでお手伝いできればいいなと思っています。以上、簡単ですけど。ご清聴ありがとうございました。

○会社名 東海建設株式会社

参加した方（4人：^{かみやたけみ}神谷武海 ^{こんどうもとひろ}近藤大裕 ^{いとうひろみつ}伊藤廣光 ^{やまだたかゆき}山田剛行 の皆さん）

平成23年4月16日～4月24日までの間、社団法人愛知県建設業協会を介した国土交通省中部地方整備局との防災協定に基づき、東日本大震災災害復旧支援活動に参加しました。具体的な支援活動の内容は、国交省の災害対策車両である排水ポンプ車を使って、24時間体制で津波により水没した地域の排水を行う作業です。

4月16日（土）午前6時、名古屋市港区の本社を出発。福島第一原発の影響を考慮し、新潟経由の日本海ルートで現地仙台を目指しました。途中何回かの休憩と取りながら、13時間半掛けてその日の夜7時半ごろ、あらかじめ予約をしておいた仙台市内の宿に無事到着。

翌17日午前8時から現地集合場所である仙台市青葉区の国交省愛子（あやし）防災除雪ステーションにて、中部地方整備局現地担当者の方から活動場所の被災状況並びに排水ポンプ車の操作方法等の説明を受けました。

いくつかあった注意事項の中で記憶に残っているのが、現地に着いたらまず安全な場所を確認しておくこと、そして待機車両は緊急避難の準備として、いざと言う時にすぐに逃げられるよう避難する方向に向けて、キーを付けたまま駐車しておくことの2つでした。この言葉を聞いて、これから向かう先が依然として危険を伴う被災地であるということを再認識させられました。

先遣隊からの引継ぎを済ませた午前10時ごろ、同ステーションを出発し、現地活動場所である東松島市大曲地区に向かい13時ごろ現地に到着。月並みな表現ですが、辺りは想像を絶した悲惨な状況でした。橋は落ち、堤防は決壊し、道路はいたるところで寸断され、元々そこに町があったとは到底思えないような広大な平地が広がっていました。そして車両を止めたすぐ横には、これまた考えられないほど大きな漁船がまるで今にも動き出

しそうな状態のまま打ち上げられおり、津波の威力の凄まじさを肌で感じました。

その後、すぐに排水ポンプ車を稼働させ、浸水域の排水作業に取り掛かりましたが、汲めども、汲めども一向に水位は下がらず、いつ終わるとも知れない状況に無力感を感じざるを得ませんでした。

そして、やがて夜になり辺りは漆黒の闇に包まれました。東北の4月は春まだ遠く、凍えるような寒さでした。それに加えて、暗闇の中、今再び余震が起きて津波に襲われたら、果たして逃げ切れるだろうかと思うと不安で一杯でした。夜が明けるのがこんなに待ち遠しく感じたことはありません。やっと夜が明け、朝10時まで排水作業を続けましたが、水位に変化はなく、国交省担当者の指示で一旦撤収することとなり、車で2時間ほど移動した川崎町国営みちのく杜の湖畔公園で待機することになりました。しかしその後再び東松島に戻ることはなく、派遣期間いっぱいまで待機を続けました。なぜなら、この日から大潮になり海水が逆流して、排水作業が意味をなさなくなったからです。それだけ広範囲に渡って堤防や岸壁が被害を受けたということです。

今回の活動を終え帰路に着くとき、ある程度の達成感があったものの、むしろ無力感の方が強く、今後の被災地の復旧、復興の大変さを思うといたたまれない気持ちでいっぱいでした。そして今回の災害が如何に甚大であったか改めて感じました。

この東海地方は東海・東南海地震がいつ起きても不思議ではないと言われています。来るべき時備えて、日頃の備えの必要性を強く感じると同時に、いざという時には我々建設業者が必要不可欠であるという意を強くしました。日頃何かと槍玉に上がることが多い建設業ですが、自信と誇りを持って日常の業務に精励して参りたいと思います。

○会社名 鈴中工業株式会社

参加した方（4人：さかおえいじ坂尾栄治 すずきよしひこ鈴木義彦 はねだ羽根田 あつし敦 はっとりはやと服部勇人の皆さん）

今回の記録作成文を書くにあたり、東日本大震災復旧支援業務を思い返してみると、まず私も鈴中工業が支援作業にあたりました4月中頃から早5か月近くも経つんだという月日の速さに驚かされます。

ちょうど震災発生から2週間ほど経った頃、会社の上司に呼ばれて行ってみると、東日本大震災の復旧支援作業に東北地方に行つてほしいという話でした。それまでも建設業協会から派遣されて支援業務にあたる名古屋の建設業者の話も聞いていましたので、そんなに驚きもせず二つ返事で承諾しました。それから2週間あまりの間に、現地の情報収集、支援活動説明会への参加、持参する物品の購入とその準備にはいりましたが、それは結構大変なものでした。現地もまだまだ混乱していて、こちらに入る情報もばらばらでしたので、最悪の事態を想定したものとなりました。寝る場所は無、コンビニ・ガソリンスタンドは閉店中で食料・水・燃料は手に入らないとのことでしたので、キャンピングカーから食料のカップラーメン、缶詰、パックごはん、水、ガソリンとワボックス車が満載になる程の準備品でした。また、用意するにあたり単一乾電池、懐中電灯、飲料水等は名古屋

でも購入が難しい状態で、現地での入手はそれこそ不可能だったと思います。

実際被災地に行ってみますと、震災から1か月程度経った頃でしたので、幾分想像していた状況よりは落ち着いていました。コンビニ・ガソリンスタンド等もほとんどが開店していて、食料・燃料等は十分入手可能な状態でした。実際、これら現地の状態は前班の業者との電話連絡等で把握出来ていましたが、もう少し早くかつ正確な情報が入手出来ていればと思いました。非常事態でのことで、情報の収集は難しいと思いますが、そんな中だからこそ情報の収集・公開・共有が必要かつ重要だと思いました。

現地での作業は、亘理町の“鳥の海”にある排水機場での排水作業でした。排水ポンプ車に搭載された発電機及びポンプの据付作業と操作についてはかなり簡素化され、操作マニュアルも装備されているため容易なものでした。しかし、今回においては運転中に降雨があり、発電機の漏電ブレーカーが働き一時運転が出来なくなるというトラブルが発生しました。搭載された発電機及び操作盤の修復方法が分からず、大変苦勞しました。操作マニュアルと一緒にトラブルの対処マニュアルも搭載してあると良いのではないのでしょうか。

最後に、この地方でも東海・東南海地震の発生が叫ばれていますが、今回の派遣で特に思うのは、やはり「備えあれば憂いなし」ですので、日ごろからの非常食・水の用意、被災した時の避難方法・避難先の用意、なにより被災するという心の用意が大事だと思いました。

○会社名 下里建設株式会社

参加した方（2人：しもさとまさし 下里真士 ひぐちかずひろ 樋口一洋 の皆さん）

3月11日を経て、一日二日と時間が経ち各方面から「東北へ支援に行けるか」と連絡が入り、社内では率先して協力したいと社員が盛り上がっていたところ、愛知県建設業協会より正式に連絡が入り4月16日より1週間の支援が決まり、まず好奇心が湧き準備を始めたところ普段有るはずの物が店頭になく注文するも在庫がなく生産ができない、追いつかない、有っても東北へと運ばれていってしまう状況で、震災後の現状の重さを初めて実感しました。実際の支援活動は、支援地が東北であったことから、往路と現場間の運転が最も困難な事の一つで、往路では遠距離であること、通常業務後の出発であること、車両がキャンピングカーであることと震災後で逐次道路状況が変わることを考慮して30時間以上前に出発をして、途中、仮眠を取りながらの行程でしたが、精神的にも肉体的にも疲弊しました。また、運悪くみちのく杜の湖畔公園へ向かう途中では降雪から積雪へとなり運転になれない雪道と重い車両での運行は、非常に緊張感の伴う作業でした。

緊張感といえど絶えず続く余震もありましたが、原発の放射能汚染が進行している中で原発より半径32kmでの支援作業では、現地に着くまでは不安という見えない放射能への緊張感がありましたが、支援地へ到着すると景色は凄惨なものに見えない放射能を意識することは、ほとんどありませんでした。携帯用の測定器や定時連絡での周辺の放射線量の報告を受けて低い数値が出ていた事も要因の一つかもしれません。

しかし、雨天時のポンプ車撤収では意識せざるを得ませんでした。雨天が続き壊れたポンプ車の撤収に手を掛けられない状況での決断でしたので特に異論はありませんでしたが未知の体験に内心は不安を抱いていました。今では杞憂に終わったのだと感じていますが職業的な「やらなければ」という意識が、当時の自身を動かしていたのだと感じます。

支援中の半分を待機で終え動かない分で疲れたということもありますが、それでも日々新しいことの連続で待機場所の川崎町でも地震の爪痕は大きく残されていましたし、各地方の整備局の方々と話をする機会もありました。時間的制約の大きい節水も体験できましたし、何より被災の状況をこの目で見られたことは大きいと考えています。地震の起こり災害が出てしまったことは、痛ましいことですし、忘れてはいけない事ですが、日々、次に地震に会うのは自分だと聞かされている中で、東海・東南海・南海で地震が起きたならば、些少の事かもしれませんが、役に立つことがあるのではないかと考えています。支援は、被災地の復旧に大いに役立ったと思いますので、被災地ではまだまだ復興ではなく復旧の段階ではありますが、今度は、私達の未来へ繋げていきたいと考えています。

(各社の活動)

